



世界の窓の
体験がある。

もくじ

1. 2014 年度春学期 授業改善のための「学生による授業評価アンケート」実施報告
2. 2014 年度第 1 回全学 F D 研修会報告
3. 2014 年度「インストラクションスキルアップ研修」開催報告
4. 「英語による授業」のための勉強会（第 1 回）開催報告

1. 2014 年度春学期 授業改善のための「学生による授業評価アンケート」実施報告

◇春学期アンケート実施状況

- ・実施期間：2014 年 6 月 30 日（月）～7 月 12 日（土）
- ・実施対象科目：演習・実習を除く全開講科目（ただし、受講登録者数 10 名以下は対象外とする）
- ・実施率：実施対象科目 712 クラス中 688 クラス実施 実施率 96.6%
- ・回答率：52.6%
- ・所見提出率：47.1%

科目毎の授業評価をクロス集計した結果の他、自由記述については全体的に内容を項目ごとに分類し集計したものを、本学HPで公開しています（学内アクセスのみ可能）。授業評価アンケートの事項と項目は以下のとおり。（健康・スポーツ学演習除く）

- I. 授業への学生の取り組み（出席率、履修の理由、自主的な学習時間、授業の理解度 他）
- II. 授業の内容と授業の進め方についての評価項目
 - ①動機づけ ②教員の熱意・配慮 ③講義内容、授業目標 ④成績評価基準 ⑤授業スキル
 - ⑥授業環境への配慮
- III. 総合評価
- IV. オプション項目

学生の学習活動に対する自覚と向上を促し、担当教員においては学生の授業への取り組みの結果を受けて、より良い授業とするための検討材料を提供することを目指しています。

2. 2014年度第1回全学FD研修会報告

2013年度第2回の全学FD講演会に続き、立命館大学教育開発推進機構教授・教育開発支援センター長の沖裕貴教授をお迎えして、以下のとおり全学FD研修会を開催しました。

テーマ：「3つのポリシーに基づく内部質保証システムの構築」

日時：2014年5月28日（水）15：00～16：30

場所：聖ペテロ館5階 第4会議室

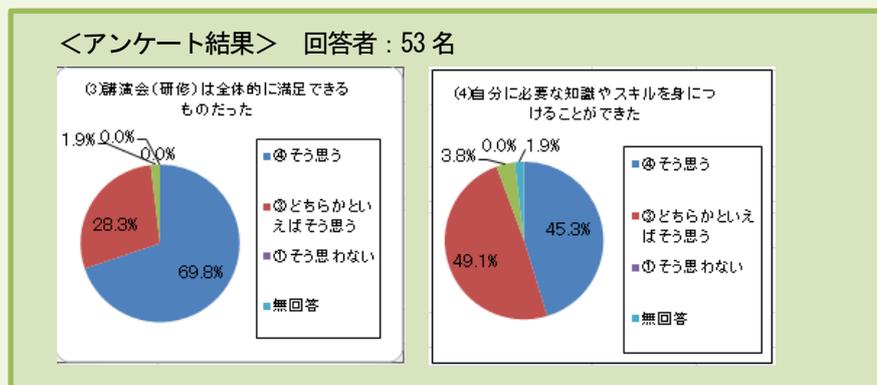
参加者：専任教員61名、兼任講師7名、職員18名（計86名）

<概要>

大学に求められる内部質保証システムの概要について、PLAN、DO、CHECK、ACTIONからなる改善のサイクルを回し続けることの意義が説明されました。これには3つのポリシーDP、CP、APの明示化が求められており、DP、CPがPLANに相当し、これに基づいて教育を実施し、その効果を測定した結果、足りない所を補う（改善）することの繰り返し求められています。中教審の答申で求められている全学的な教学マネジメントには、上記のような内部保証システム（PDCAの回る組織）を確立することに尽きるとの沖先生の言葉が印象的でした。DPとCPの関係の明示化にあたっては体系性、整合性、適切性が重要な要素であり、そのための具体的な取り組みとしては「カリキュラム・マップ」と「カリキュラム・ツリー」が重要です。カリキュラムの目標達成には、認知領域・情意的領域・精神運動領域の分類と、達成目標・向上目標・体験目標の分類を組み合わせた「観点別教育目標の理論」があり、ここから、知識・理解、試行・判断、関心・意欲、態度、技能・表現などの学習能力の差を識別することが可能になるそうです。目標構築においては常に「学生が〇〇できる」のように、学生が主語になるように設定することが大切との説明がありました。

続いて、DPにおける観点別人材養成像の例として、滋賀県立大学工学部電子システム工学科、立命館大学情報理工学部、ハーバード大学などの例を挙げられ、どの大学においても余分な修飾を使わずに、最低限の内容が端的に記述されていることが分かりました。

沖先生による講演が終わり、続けて、社会学部長より、社会学科および社会福祉学科のDP改革案の説明と、両学科のカリキュラム・マップ案の説明がありました。講師からのコメントを受けて、会場では活発な質疑応答が行われました。



3. 2014年度「インストラクションスキルアップ研修」開催報告

初年次教育で指導する「レポート作成」「ノートの取り方」などを、どのように指導したらよいのか……。こうした悩みに応えるべく、今年度初めて学習支援センターと全学FD推進委員会共催による研修を行いました。この研修プログラムは、学習支援センターで蓄積している学習支援のノウハウを「初年次教育シリーズ」として構成し、実践的なワークショップを経験しながら指導力のスキルアップを図ることを目指したものです。

[第1回]「レポート作成」

日時：2014年5月7日（水）13：20～14：20

場所：1-206教室

参加者：教員15名、職員2名（計17名）

[第2回]「ノートの取り方」

日 時：2014年5月14日（水）13：20～14：20

場 所：場 所：1-206 教室

参加者：教員10名、職員1名（計11名）

[第3回]「プレゼン資料の作り方」

日 時：2014年5月21日（水）13：20～14：20

場 所：1-206 教室

参加者：教員8名、職員1名（計9名）

研修では、実際に日頃学生からの相談を受けている学習支援センターのスタッフと、参加教員との間で活発な意見交換が行われました。参加者から、学習効果を上げるための手法を具体的に学びあえる機会を設けるのはいいことで、進め方や素材を、本学学生の実態に即したものにすれば、より良い研修となる、などの意見が寄せられました。

4. 「英語による授業」のための勉強会（第1回）開催報告

英語で授業をやっているが、もっとスキルを高めたい。英語での授業にチャレンジしてみたい。

英語で行う授業とはどうあるべきか？

といった様々な悩みを抱える教員と共に、英語で行う授業について考えよう、という勉強会を開催しました。

テーマ： 第1回 Lecturing in English

日 時： 2014年7月30日（水）17：10～18：30

場 所： 学習支援センター

参加者： 教員9名、職員3名（計12名）

学習支援センターで学習アドバイザーである DECKER, Warren 先生と学習支援センター職員の高良要多氏がファシリテーターを務め、現在、英語による授業を行っている教員から各々現状報告をしていただきました。その中で抽出された問題点（課題）は次のように整理できます。

①受講する学生の理解度に差があり、どこにターゲットを絞ればよいのか。

- ・学部生 or 大学院生
- ・Native or non-native（留学生 or 日本人）
- ・専攻 or 非専攻

②「英語による授業」の位置づけが不明である。

これらの問題点（課題）について意見交換を行いました。

①については、一定の英語レベルでクラスを分けてはどうかといった意見が出た一方で、英語レベルを問わず、多様な学生が入ることによる効果についても意見がありました。英語レベルの差を埋めるため、事前にテキストの予習を求めたり、講義中心ではなくグループ学習を取り入れる、レジュメやパワーポイントを利用して理解の促進を図る工夫を行っている事例や個人面談を行って対応していることなどが報告されました。

②については、各学部での「英語による授業」の位置づけが明確化されていないことに起因していると思われるが、カリキュラムの問題、教育の質保証の問題とも相俟って、組織的な検討が必要な課題といえるかもしれません。

今後も全学FD推進委員会では、学内で協力しながらFD研修の支援を行うなど、全学的なFDの取り組みを推進して参ります。